

開拓うらほろ

■ 謙敬寺開基住職（飯居 琳） 六

“僧侶で医師だった人”

農場の中央にできた本堂庫裡兼用の新しい住居は不便な場所でした。飲料水は右の沢まで、坂のある五百メートル以上の所へ汲みに行かねばならず、道は細い馬道で、川沿いに歩くか山の頂きをたどって、山越えで農場事務所や大津市街へ出なければならぬ所でした。

後になって道路が造られて、浦幌川の手前にあつた小川に橋が架けられると、右の橋を安楽寺橋（川向いに越中安楽寺在から入植した奥村吉蔵が住んでいた）、左の橋を大谷橋（大谷派のお寺があるから）と呼ばれるようになりました。

二男教照の死

母八ツに遅れて長男大専と三男教深がともにやって来て、

大専は浦幌特別教育所（浦幌小学校）に、二男教照は大津小学校の教員として勤めるようになっていました。若く温厚な教照は生徒に親しまれ、父兄に信用されていました。

しかし北海道の風土は教照の身体をむしばんでいました。大津で下宿生活をしていた教照は脚気を患い、下宿先で思うような養生はできません。

朝露を裸足で踏んで歩き、小豆（アズキ）の入った麦飯を食べるのが一番効きめがあるというので、夏休みに入った八月一日、家で養生するため腫れた身体でやっと歩いて、広川豊右エ門の家までたどり着くと、そこで倒れました。

教照が近くの人たちで戸板に寝せられて運ばれてきたとき、琳は新しく建った本堂の壁に

つける足場の上で葺簀（よしず）を編んでムシロを作っていました。

これは大変だと、あれこれ手当てをしたのですが、翌二日亡くなってしまいました。琳、八ツの悲しみはどれほど深かったことでしょう。

銀政母子の来道

悲嘆のうちに教照の葬送が終わると、秋には本堂庫裡兼用の建物が完成し、十一月十一日に四男馨が誕生しました。

悲しみと喜びの明治三十三年が過ぎた翌年（一九〇一）春、能登宇出津の、宮本家の女性が五歳になった銀政を連れて、生い茂る草と荒々しい樹皮に包まれた幹の、まだ畑らしく整わない開拓地の浦幌を訪ねました。

ちびっこギャラリー

gallery for a kids artist



お父さんを似顔絵です。
左から広尾真子ちゃん
関井瞭くん
谷川あやめちゃん
厚内幼稚園

シシドリ（ホトトギス科）

80

L 33 W 56

色も形もカッコウによく似ているが、胸から腹にかけての横じまが太めで粗い。写真は赤色型。托卵をする。夏鳥



フィールドノート

H 16. 6月 東山町

久しぶりに平和塔に行ってみた。よく晴れて遠くの山並みがくっきりと浮かび、しばし、鳥のことを忘れて写していた。

すると、これぞ「無欲の勝利」か、気がついたらそこにいた。

by トリおばさん

うらぼろ野鳥図鑑

町長室から

厚内中学校・常室小学校・吉野小学校の最後の運動会に出席させていただきました。

厚内中学校は幼稚園・小学校との合同大運動会です。漁業を中心として発展した地域らしく大漁旗がなびき、海風によって潮のにおいも流れてきます。趣向を凝らした競技もあり、「浜っ子」らしく元気に校庭を駆け抜けていました。

常室小学校は、浦幌町で最初にできた小学校で、105年の歴史には重みがあります。校下の住民が2組に分かれ、先人から受け継がれてきた伝統の「綱引き」では、開拓の頃の「力自慢」と力を合わせ、開墾に思いを抱きながら一緒に綱を引き合いました。最後は、小学生から老人までの全住民がひとつの輪になり「ジェンカ」を踊りました。運動会シーズンの最後となった6月13

先にも述べましたが、女人は琳が説教に頼まれ歩いていったとき、能登宇出津で愛した女性です。五歳の銀政は琳の子で、船での長い旅でした。思慕のきずなの断ち難かったのもさることながら、どんな暮らしをしているのやら、農場の人たちと同じ苦労の日暮らしをしているのなら、能登へ帰って布教に勤めれば、相当の支持者が増えるはず、場合によっては、皆を引き連れて帰ろうというやるせない

下心があったようだった。と響が書いています。女人の心の奥深い場所に、その気持ちは確かに息づいていたかもしれないませんが、琳には琳を追うように渡道していた妻子と義父、前年生まれたばかりの「響」、九人家族がいたのでした。

高台から前方を見れば、草茫ぼうの中にヤナギ二筋が密生して、帯のごとく湾曲しながらつづいている浦幌川。遥かはるか彼方の先に、まだ解けない雪をのせた十勝連峰の頂上が見えるのみ。左は山が出張っついで農場地帯はどの辺りやら…。鳥さえ鳴かず、梢のゆらぐ音と川のせせらぎの音しか聞こえぬ静寂…。事務所から届く米は粘り気が少なかった…。と響は述べています。

しばらく滞在した銀政母子は便船を待つて帰国しました。
高橋悦子

日は、吉野小学校で運動会が行われました。開会式では、永年にわたり小学校運営にご協力を頂いた皆さまと計画的閉校に向けた地域の取り組みにお礼を述べました。応援合戦から始まり、子供たちも住民も出番が多く、最後の運動会を惜しむかのように大勢の人が競技に参加していました。校庭には104年の歴史と大勢の子供たちを見守ってきた、大きな「ミズナラの木」がありました。

激しい時代の移り変わりの中で地域とともに歩んだ学校の閉校は、地域の灯が消えるような寂しさがあると思います。少子高齢化・価値観の多様化など急速に変化している社会情勢の中、健やかな子供の成長を願う地域住民の気持ちを大切にしていきたいと思いました。

閉校記念運動会

町長 八木 忠宏